

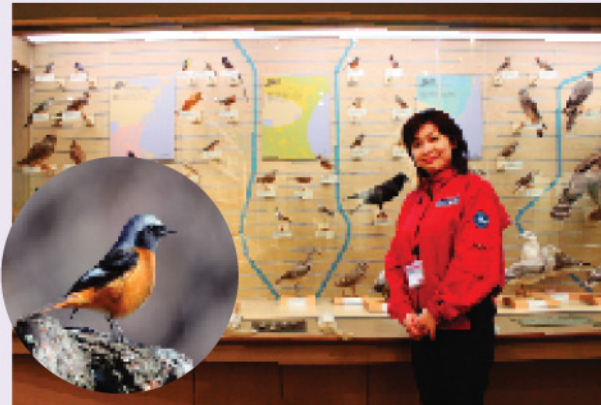
## 博物館への問い合わせより この木、何の木… 弥生時代の工具の柄の材質は？

先日「この石斧の柄は何の木で作ってあるの？」という質問がありました。弥生時代のコーナーには大陸から伝わった代表的な工具で、高鍋町持田中尾遺跡から見つかった石斧(レプリカ)に柄を取り付けた復元模型が展示してあります。石斧ではなく柄に関する質問は初めてでした。

木の道具は石や鉄と違って、土の中に埋まってしまうとほとんど腐ってしまい残らないことが多いので、ほとんど形や木の種類が分かりません。そこで、水田跡などの湿った土地の遺跡から完全な形の木製農具が見つかることがあり、それらを参考に復元されています。また、住居跡の中に残る、焼けて炭になった柱などからも木の種類が分かります。そこで最初の質問の答えですが、「おそらく、カシなどの木が使われていたと思います。」となります。(永友)



## 展示解説員の声



寒さが一段と厳しくなるこの頃、博物館の周りには冬限定のお客様がいらっしゃいます。名前はジョウビタキ、毎朝一番に姿を見せます。神宮の森の冷たく澄んだ空気の中、「ヒツヒツ カツカツ」という鳴き声は、火打ち石を叩くようにも聞こえます。枯れ木にポツと灯がともったような姿に出逢えると、決して派手な鳥ではありませんが嬉しくなります。大きさはスズメほど、オスメスとも翼に白い斑点があり、これを和服の紋に見立てて「紋付鳥」とも呼ばれます。お正月、成人式にぴったりのおめでたい名前です。自然史展示室には剥製を展示しており、鳴き声を聞くことができます。神宮の森で、そして自然史展示室で、ジョウビタキの愛らしい姿をどうぞご覧下さい。(山元)

## お知らせ

### 「わたしの好きな牧水の歌とその思い」作品募集のご案内

～あなたにとって身近な牧水の歌とその思いを書いた原稿を募集します。～

- ①募集期間：2010年1月12日(火)まで《必着》  
②募集対象：一般(高校生の年齢以上)の部と小・中学生の部※  
(※宮崎県内の小中学生のみ対象)  
③応募方法：牧水が詠んだ歌の中で、自分が最も好きな歌一首とその思い(選んだ理由)を書いて400字詰め原稿用紙1枚以内(未発表のもの)をお送りください。原稿はワープロ打ちでも可能(400字以内を厳守のこと)とし、総合博物館ホームページの申込みフォームからお申込みできます。  
(注)申し込まれた作品に関する権利は総合博物館・若山牧水記念文学館に帰属し、原稿等もお返しできませんので、あらかじめご了承ください。

- ④応募先：〒880-0053 宮崎市神宮2-4-4  
宮崎県総合博物館  
「わたしの好きな牧水の歌とその思い」係

《問合せ》  
電話0985-24-2071 FAX 0985-24-2199  
<http://www.miyazaki-archive.jp/museum/>

- ⑤表彰：各部門で最優秀賞1点・優秀賞3点・佳作5点の合計18点。なお、開会式※において入選作には賞状と記念品(日向市若山牧水記念文学館長・伊藤一彦先生〈審査員〉のサイン入り牧水関連図書など)を贈呈します。

※開会式は2010年2月6日(土) 午前10時よりの予定。



## 特別展

### 「歌人若山牧水展」 ふるさとの牧水、再発見！

2010年2月6日(土)～3月22日(月)

時 間：9:00～17:00(入場は16:30まで)

※2月6日(土)のみ開会式後の11:00より開場

場 所：宮崎県総合博物館 特別展示室(2階)

休館日：[2月] 9・12・16・23日

：[3月] 2・9・16日

観覧無料

主 催：宮崎県総合博物館

日向市若山牧水記念文学館

問合せ：宮崎県総合博物館 宮崎市神宮2-4-4

TEL0985(24)2071

この展示会では真実の牧水像に迫るため「旅」「恋」「酒」や「ふるさと」などのテーマを通して、彼の残した遺墨・遺品・写真や書簡など約400点を鑑賞しながら牧水の間像を多角的に捉える構成としました。特に、牧水直筆の色紙・短冊・条幅などの秀逸作品を約40点一挙公開します。また、牧水にとって無二の親友だった平賀春郊(本名・財蔵)宛の書簡約260点も必見です。

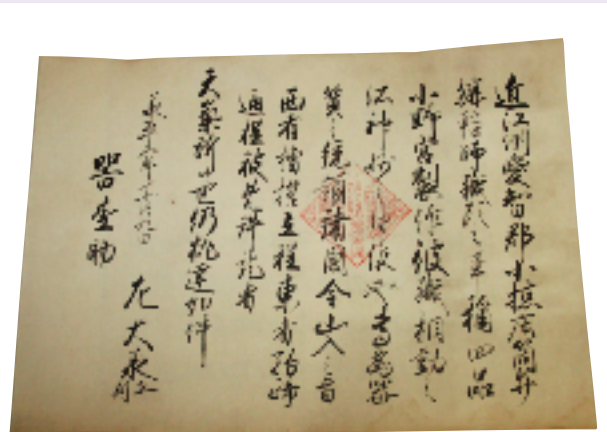
なぜ牧水の歌が死後80年以上も経過した現代にも読み継がれ、人々に親しまれているのかを皆さんにも再認識・再発見してもらう機会にしたいと思っています。

## 宮崎の歴史情報

木<sup>き</sup>地<sup>じ</sup>屋<sup>や</sup>文<sup>もん</sup>書<sup>じょ</sup>

平成21年10月3日から11月23日まで開催した「暮らしの中の竹と木」の展示会で、日向の木地師<sup>きじし</sup>を取り上げました。木地師とは、轆轤<sup>ろくろ</sup>とよばれる道具を使用して木椀<sup>きわん</sup>などの木製品を作る職人のことです。文献によると古代からその職業はあったようです。木地師は小椋<sup>おぐら</sup>という姓をもつ職人の集団で、近江国<sup>おうみのくに</sup>（現在の滋賀県）の小椋谷が故郷とされています。そこに残る資料から、江戸時代に本県にも木地師が各地にいたことが確認されます。本館には、五ヶ瀬町の小椋家に伝わる「木地屋文書」のレプリカがあります。木地屋文書は、お墨付きといわれるもので、木地師が自由に山地に移動することを保証されたものです。本県では五ヶ瀬町の小椋家にしか残っておらず非常に貴重な資料です。

木地師は時代の流れの中で職業を変えたりして、現在ではあまり木製品を製作しなくなり、その数は少なくなりました。五ヶ瀬町の小椋家も明治・大正には木地の製作をしなくなりました。（小山）



## 常設展示室紹介

## 地質情報コーナーを新設！！

1階自然史展示室一番奥の「宮崎の大地」入口に、大型標本を展示できるガラスケース「地質情報コーナー」を新設しました。

常設展示室はストーリーやテーマを設定して構成されているため最新の標本や大型標本を追加するスペースが限られていました。しかし、博物館の資料収集活動や県民の皆さんからの資料の寄贈などで収蔵資料は日々充実していています。

今回製作したケースは解説パネルの掲示板を備えており、新着標本の紹介、最近のトピックスやミニテーマ展示などを中心に他の常設展示に影響を与えない自由な展示空間を目指しています。

現在、地質情報コーナーには大小21点の化石を展示中。展示会の時だけしか収蔵庫から出てこなかつ

た五ヶ瀬町産「県内最大アンモナイト」が常設展示室に就いて登場！このほか、昨年、都井岬で収集した「さざなみとヒトデの化石」をはじめ、野尻町の「50万年前の種子化石」、宮崎市の「巨大カキ化石」など新着標本がいっぱいです。

今後も新しい標本や普段お見せすることのできない標本を展示していきます。（赤崎）



## 講座紹介

## 「春と秋の自然観察会」



植物部門は春と秋の2回、自然観察会を開いています。今年度は、春は5月9日に県北の丹助岳<sup>たんすけだけ</sup>で行いました。丹助岳は日之影町の東部にある標高815mの山です。国指定名勝の比叡山<sup>ひえいざん</sup>および矢筈岳<sup>やはすだけ</sup>のすぐとなりです。山頂からの眺めが非常に良い山です。

登山口から歩き始め、途中に出てくる植物について説明をしていきました(写真)。

この日の最大の目的はツツジ類を見ることでしたが、今年は何故か開花が早く、オンツツジやフジツツジは花が終わりかけていました。逆に開花の遅いベニドウダンツツジが咲き始めていて、それはそれで収穫でした。途中、キンランの開花株に出会い、参加者は皆感慨深げに見入っていました。山頂には福岡県から来たという花好きのグループがいて、キンランの話をするとうらやましがっていました。この日はテレビ局の撮影クルーが終始同行し、観察会の様子を撮影し、参加者にもコメントを求めています。秋の観察会は、9月12日に、霧島山の中岳で行いました。（斉藤）

## 収蔵資料紹介

こう ちゅう もく

## 甲虫目の乾燥標本



【写真1】カミキリムシ科



【写真2】コガネムシ科

宮崎県内において確認されている甲虫目は約1,800種です。そのうち、博物館の昆虫収蔵庫には、甲虫目の乾燥標本が約500種収蔵されています。この標本は、博物館が行う調査において、学芸員や調査員によって採集されたものがほとんどですが、中には県民の方から寄贈されたものも含まれています。

長い触角が特徴的な【写真1】のカミキリムシ科の標本は、約150種と一番多く収蔵されています。宮崎県内では、毎年のように初記録のカミキリムシが採集されていて、今後も収蔵種数は増えていくと考えられます。【写真2】のコガネムシ科には、動物の糞や死体に集まる種や花に飛んできて花粉を食べる種など様々なコガネムシが含まれます。子ども達に大人気のカブトムシも実はこのコガネムシ科の一員です。

現在、名前の付いた甲虫目は世界中で約37万種と報告されています。しかし、これから調査が進めば、まだまだ新種が出てくると予想されています。もしかすると、あなたの近くにも新種がいるかもしれません。新種の発見に挑戦してみてもいいかもしれません。（山田）